

## 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌創刊に寄せて

看護学部長 大見 サキエ

幼子が「あれは、なあに？」、「これは、なあに？」と好奇心旺盛に指差して様々な質問をする光景はよく見かけることです。さらに「なぜ、空は青いの？」に代表されるような「なぜ」、「どうして」とその理由を知りたがり、周囲の大人を困らせることもあります。今でこそ、「なぜ空が青いか」については、科学的見地から説明はできるでしょうが、過去には返答に窮したことでしょう。科学が進んだ現代においては、研究の成果として様々な「なぜ？」が解明されつつあります。人は環境との相互作用によって生きています。周囲の様々な事象に興味・関心を持ち、追究しようとする姿勢は、人間の素晴らしい才能といってよいでしょう。研究は「何？」、「なぜ？」というささやかな興味・関心、疑問から始まり、分野によっては「どうしらよいか？」と追究し続けて成果が表れてくるものです。

広辞苑を見ると研究とは「良く調べ考えて真理をきわめること」とありますが、南は看護研究とは「疑問に答えたり、問題を解決したりするために、組織だった科学的方法を用いて行う系統的な探究である」と定義しています。今日まで看護研究は看護実践のために科学的基盤を確立する上で重要な役割を果たしてきました。ここ40数年の看護研究の歴史をみると、様々な分野の研究方法を取り入れて著しく発展してきました。経験上誰もがなんとなく知っている(つもりの)看護の方法は、根拠を示しながら提示されるようになり、研究は看護の質向上に多大な影響を与えてきました。例えば「褥瘡のケア」は「皮膚を清浄にした後、乾燥させて、湿潤させない」というのが大原則でしたが、皮膚の回復の機序が明らかになるにつれ、それは大きな間違いであることが判明しました。その後は「皮膚を清浄にした後、乾燥させず、適度な保湿を心掛ける」というように大転換したわけです。「当たり前＝自明の理」と思われているケアの原則をも見直し、研究することで日々看護の質は向上し続けています。従って看護研究を行うことは、看護専門職の大きな責務でもあります。

さて、看護研究を進めるに当たり、帰納的方法か、演繹的方法かの枠組みを設定してから、具体的な研究方法を選択します。その課題に合った研究方法を選択する必要があります。最近では、帰納的質的研究方法が多数見受けられますが、どの研究手法か明記されずに結果を出している論文が多いように感じます。量的研究、質的研究のいずれにしても一つの研究方法をしっかり学んだ上で取り組むことが、より研究成果の信頼性や妥当性を高め、ひいては看護の質向上に貢献できると考えます。

医学は日進月歩、それに付随して、看護も同様です。この看護学研究誌の役割の一つは、多くの研究者、特に若手研究者に研究発表の機会を提供し、研究意欲を高めることにあります。今後、岐阜聖徳学園大学看護学研究誌が有意義なものとして継続、発展していくことを期待しています。